

## 妊娠と新型コロナについて

### はじめに

妊娠中は新型コロナウイルスにかかわらず特定の感染症にかかると重症化しやすくなったり、かかるとお腹の赤ちゃんに影響が出ることがあるということが知られていますが、新型コロナウイルス感染症は妊娠に悪影響を与えるのでしょうか。

### 妊娠中に新型コロナに感染すると

妊娠中に呼吸器感染症(例えばインフルエンザ)に罹患すると重症化しやすいことが知られていますが、昨年4月の時点では、妊娠中に新型コロナに罹患した場合も重症化した事例はほとんどなかったため、妊娠は重症化のリスクファクターではないのではないかと考えられていました。しかし、その後の新型コロナウイルス感染者の増加に伴い、より大規模な研究結果が集積されてきました。

中国の11000人の新型コロナに感染した妊婦を解析した報告によると、90%以上が分娩前に回復したものの、49%に肺炎がみられ、そのうちの3割が酸素吸入を必要としました。また、13%が重症化し、4%の妊婦は集中治療室(ICU)に収容され、3%が人工呼吸管理を受け、0.8%がECMOを要し、最終的には0.6%が死亡しました。これは、同じくらいの年齢の新型コロナに感染した非妊婦と比較して、ICUに入室するリスクが1.62倍、人工呼吸管理のリスクが1.88倍です。また、コロナに感染していない妊婦と比較して、死亡リスクが18倍、ICUに入室するリスクが71.6倍、早産のリスクが3.01倍まで上昇するそうです。

アメリカで新型コロナに罹った約40万人の15歳から44歳までの女性を解析した報告では、約2万人の妊娠女性と、約39万人の非妊娠女性と比較検討されていますが、これによると、新型コロナ患者では、妊娠している女性は、妊娠していない女性と比べて、5.4倍入院しやすい、3.0倍集中治療が必要となる、2.9倍人工呼吸器が必要となる、2.4倍ECMOが必要となる、1.7倍死亡しやすい、という結果でした。

5.4倍も入院しやすいという結果は、「妊婦だから大事を取って入院したほうが良い」という判断に関連していることも考えられますが、集中治療や人工呼吸器の使用、死亡の増加については「妊婦だから大事を取る」という判断ではなく、実際に妊娠と関連しているように思われます。これらのことから、妊娠中に新型コロナに感染することで重症化しやすくなる可能性があり、妊婦はより感染に注意した方が良いと言えるでしょう。

### どういう妊婦が新型コロナに感染すると重症化するのか

一般的な新型コロナウイルス感染リスクと同様に、年齢、肥満、高血圧、糖尿病などの背景があると重症化しやすいようです。

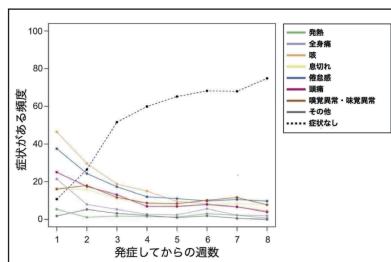
中国の11000人の新型コロナ感染妊婦の解析では、35歳以上の妊婦、BMI $\geq$ 30以上の肥満、高血圧、糖尿病が重症化のリスク因子であったと報告されています。こうした背景を持つ人が妊娠中に新型コロナに感染すると重症化しやすいため、特に感染対策を徹底することが大切です。

### 妊婦が新型コロナに感染したときの罹病期間

罹病期間には差がなく、妊婦だから特別に長引きやすいということはないようです。

新型コロナウイルスの患者では、急性期の症状を過ぎた後も「LONG COVID」と呼ばれる症状が遷延することがあります。日本からの報告でも、発症から60日経った後にも、嗅覚障害(19.4%)、呼吸苦(17.5%)、だるさ(15.9%)、咳(7.9%)、味覚障害(4.8%)があり、さらに発症から120日経った後にも呼吸苦(11.1%)、嗅覚障害(9.7%)、だるさ(9.5%)、咳(6.3%)、味覚障害(1.7%)が続いていました。

新型コロナに感染した妊婦に関して症状が遷延するか調べた研究でも、妊婦だからといって特別に症状が長引きやすいということはないようです。



594人の新型コロナ感染妊婦の病状の推移

### 妊娠の経過への影響

新型コロナウイルス感染症の妊婦は早産が増える可能性が示唆されています。中国の11000人の新型コロナ感染妊婦の解析では、新生児の95%以上は出生時の状態が良好でしたが、65%が帝王切開で分娩しており、17%が37週未満の分娩(早産)でした。一方、アメリカの新型コロナに感染した妊婦から生まれた3,912人の新生児を解析した研究では、12.9%が早産(37週未満)で、アメリカでの推定値10.2%よりも高値でした。32人が流産でしたが、そのうち12人(0.3%)が妊娠20週未満で、20週以上が20人(0.4%)でした。198例(5.7%)は妊娠週数と比較して低体重で、9人(0.2%)の新生児が死亡しています。出生時に新型コロナウイルスのPCR検査が陽性であった16人の新生児のうち8人(50%)は早産であり、そのすべてがICUへの入院が必要でした。「自然流産は増加しない」とする報告がいくつかありますが、まだ十分なデータがないようです。

### 新型コロナ感染時の分娩方法は

現時点では新型コロナに感染したことによる帝王切開は推奨されていません。イタリアからの報告では、帝王切開での分娩が母体の重症化につながる可能性が示唆されており、82人の妊婦のうち41例(53%)が経膈分娩、37例(47%)が帝王切開分娩で出産しました。経膈分娩で分娩後に集中治療室に入った妊婦はいなかったのに対し、帝王切開分娩では5人(13.5%)が集中治療室への入院を要し、また経膈分娩の妊婦2人(4.9%)と、帝王切開分娩の妊婦8人(21.6%)が出産後に臨床的に悪化したとのことです。

ただし、この報告では症例数が少ないことから、アメリカ産婦人科学会は現時点では新型コロナに罹患しているからといって分娩の方法を変える必要はないとしています。

日本産科婦人科学会、日本産婦人科医会、日本産婦人科感染症学会の3学会による「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応(第5版)」でも、「現時点では新型コロナウイルスに感染した方の産科的管理は通常に準じますが、対応医療機関における院内感染対策には十分留意してください。なお、感染拡大に応じ、施設によって原則帝王切開とすることもやむを得ないと考えます」と記されています。

### 母子感染は

新型コロナウイルスの母子感染の頻度は高くないようです。母子感染の頻度について検討した研究では、妊娠第三期の新型コロナ感染妊婦936人から生まれた新生児のうち、約3.2%(22/936)が新型コロナウイルスのPCR検査で陽性であったと報告されています。しかし、こうした母子感染例のほとんどは、出生後に母親からの飛沫感染または接触感染によって感染した事例と考えられています。

### 母乳からの新型コロナウイルス感染

母乳から新型コロナウイルスが検出された事例が報告されていますが、母乳を介した感染が起こり得るかどうかはまだ分かっていません。WHOが行った調査では、46人の妊婦のうち3人の妊婦の母乳から新型コロナウイルスは検出されたものの、培養可能な生きたウイルスではなかったとのことです。これらの結果や、母乳栄養のメリットを考慮して、WHOは新型コロナに感染した妊婦であっても母乳栄養を行うことを推奨しています。

### 妊娠中の新型コロナウイルス感染対策

「こまめな手洗い」、「3密を避ける」、「屋内でのマスク着用」に気をつけることはもちろんのこと、周囲の人も妊婦に感染させないように感染対策を徹底することです。アメリカ疾病予防管理センター(CDC)は新型コロナウイルス感染症に関して、妊婦に以下のことを推奨しています。

#### 【妊婦が新型コロナに感染するリスクを減らすために】

- ① 分娩前の受診は定期的
- ② 人との交流をできるだけ減す
- ③ 人と接する際には、新型コロナに感染しないようしっかりと感染予防策をとる
- ④ 新型コロナが流行している間、健康を維持し、自分自身をケアする方法について、かかりつけの医療機関に相談する
- ⑤ 医療上の緊急事態が発生した場合は、すぐに医療機関を受診する
- ⑥ 新型コロナに感染した母から子どもに母乳をあげる場合、
  - ・専用の搾乳機を使用する(共用しないこと)
  - ・授乳中は布製のフェイスカバーを着用し、搾乳機に触れる前、および授乳する前に、石鹸と水で少なくとも20秒間手を洗う
  - ・可能であれば、新型コロナに罹患しておらず、重症化のリスクが高くない健康な同居者が代わりに搾乳器で採取した母乳を乳児に与えることが良い